



第44回

スキー・ジャンプ女子の進化と向上

※2024年4月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘していただきます。

ノルディックスキー・ジャンプ女子の高梨沙羅選手が2023〜24年シーズンを終え、「人生で一番の思い出になるような経験」が

200以上の飛距離で争うフライングヒルの開催は、女子の競技レベルの向上を意味する。

できたとして明るい表情を見せたノルディックスキー・ジャンプ女子の高梨沙羅選手が2023〜24年シーズンを終え、「人生で一番の思い出になるような経験」ができたとして明るい表情を見せた。

同時に、このシーズンは時代の変化を感じさせた。W杯で女子最多63勝の高梨選手に次ぐ30勝を挙げたマーレン・ルンビさん（ノルウェー）と、通算3位の16勝を挙げたダニエラ・イラシユコ（オーストリア）さんが現役を引退。一方で3月に19歳になったばかりの

「徐々に思っていることが体現できるようになってきたかな」。

ニカ・プレブツ選手（スロベニア）が初の個人総合優勝を飾った。

3月27日に欧州から帰国して羽田空港で取材に応じ、シーズンをこう総括した。その中でオリンピックを上回るほどの「一番の思い出」と表現したのが、同17日に女子ワールドカップ（W杯）で初めて開かれたフライングヒルの試合だ。

高梨選手は22年3月を最後に勝利から遠ざかる個人総合はここ4シーズン、2、5、10、9位で、この間は毎シーズン、総合優勝者が入れ替わった。だが、高梨選手は今年2月の試合で2位となり、女

子W杯の初年度から12季連続で表彰台に上がって存在感を示した。

日本代表の横川朝治ヘッドコーチ（HC）は「みんなのレベルが上がっている中で彼女自身、進化している」とみる。具体的には飛行曲線の変化を挙げ「以前はすごく高いところに飛び出していたが、今は高いだけでは成功とはいえない。（競技レベル向上に伴いスタート位置が下げられ、助走速度が落ちた）ロースピードの試合に対応できるようになり、今はそこまで高く飛び出さず、後半に高くなる形になってきている」と話す。

女子は日本、オーストリア、ノルウェー、ドイツ、スロベニア、オーストリアがけん引してきたが、カナダ、フランス、フィンランドが台頭し、「群雄割拠」の時代に突入した。その中でも、女子W杯の初年度から奮闘する選手が個人総合で上位に入った。

2季連続で2勝した伊藤有希選手が4位、ジャクリン・ザイフ

リースベルガー選手（オーストリア）は5季連続2桁順位から復活して5位、今季勝利なしながらも表彰台4回のカタリナ・シュミット選手（ドイツ）が10位に入った。

9位の高梨選手を含め、横川HCは「新しい変化があるたびに進化し、対応している」とみる。高梨選手がザイフリースベルガー選手について「ずっと一緒に飛んできた選手の一人なのでうれしい。毎年誰が出てくるか分からない競技でもあるので」と刺激を受ける。

総合覇者のプレブツ選手と、大けがから復帰して今季3勝を挙げ総合7位に入ったアイリンマリ・クバンダル選手（ノルウェー）について、横山HCは「この2人は運動能力が高く、スピード、体形などを含めて男子並みのジャンプができる」と指摘する。だが、女子選手は体形の変化などがあり、安定した成績を出し続ける高梨選手らは希少な存在だ。

高梨選手は「いろんなことを試したシーズンでありながら、自分

に合うものを見つけられてはいると思う。シーズンによって、はやりはあるが、自分に合うか合わないかをいち早く判断していきたい」と来季を見据えた。